

5.4. トーストマスターズ全欧大会

このスピーチクラブについては第四編（趣味生活編）でも紹介した。ヨーロッパには約五十のクラブが九つの地区で活動している。イギリスを除いた非英語国民のクラブの集まりである。盛んなのはドイツ、フランス、スウェーデン。ここでも「英語」への学習意欲が会員を動かしている。国連のクラブは第九地区の一員で仲間はウィーン市内にあるもう一つのクラブとチェコのクラブである。毎年春秋の二回、各地区代表によるコンテストが開かれる。この全欧スピーチコンテストに地区代表として三度出場した。秋のヒューモラススピーチコンテストに二度、春の総合スピーチコンテストに一度である。

最初は1997年10月のハイデルベルク大会。事前の地区予選で優勝してしまった時（予想外だったから正に「優勝してしまった」感だった）、家内は「内容はともかくあんたがヒューモラススピーチで勝つことの方がよっぽどおかしい」と大笑いしていた。従来の「真面目人間」からは想像できない変身ぶりだったらしい。公務のロシアから帰った翌週末慌ただしく夜行列車で駆けつけた。題材は「男の料理」。本物の鯖、まな板に包丁を持ち込んで三枚に下ろしながら、指を傷付けた経験に尾鰭をつけて話した。聴衆は身を乗り出して見入っていた。「血」をトマトケチャップで、「切り落とした指先」を人参の切れ端で模し聴衆に投げ込んで爆笑を誘った。が、落選だった。会場の後方にビデオカメラを固定して撮影を試みたが身を乗り出して見入る聴衆に遮られて肝心のパフォーマンスが撮れていなかった。

二度目は1998年11月の地元ウィーンでの大会。二ヶ月前に入院した話を題材にした。特技(?)の胃カメラを呑む話も織り込んだ。演台のテーブルの上にパジャマを着せた人形を患者として横たえ、首元から差し込んだ電灯線で胃カメラを模した。カメラで見る胃壁は火山の噴火流に見え、火口が潰瘍だと説明した。地元の大会なので何とか入賞したかった。かなりの爆笑を誘ったが駄目だった。仲間が随分慰めてくれた。落ち込んだのが分ったのだろう。

三度目は総合スピーチコンテスト出場で2000年5月のルクセンブルク。ディッケンズの「二都物語」の登場人物に自分の初恋の思い出をダブルさせて「半実半虚」の話をした。「愛は力であり、犠牲的であり、美しい、時に絶望的にする」と語って共感も得たがやはり入賞はできなかった。

大会出場のための旅費や参加費は自弁である。好きでなければやっておれない。落選続きだったが楽しくもあった。その後の大会会場で顔を合わせると、「ハロー、名前は忘れたがお前ハイデルベルグで『魚』をやっただろう」と話し掛けてくれる。各国の役員やウィーン仲間の中に顔が売れて「ウィーン地区ガバナー」に推薦された。が、「滞在はあと二年、他にやりたいこともあるから」と辞退した。

代表としてではなく、一般参加ではこの他に二度顔を出した。1999年のミュンヘンと2002年のチェコ、パドビーチェ。最後のパドビーチェ大会は滞在最後の参加で顔なじみの仲間への別れの挨拶をしに出かけたようなものだった。日本に戻ってからも続けるかどうか、迷っている。

